

SHOW HEY シネマール

★★★★

ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家

2022年/フランス映画

配給：ミモザフィルムズ/105分

2023 (令和5) 年9月26日鑑賞

シネ・リープル梅田

Data

2023-111

監督・脚本：シジル・ルティ

出演：マーシャ・メリル/ティエリー・ジュス/アラン・ベルガラ/マリナ・ヴラディ/ロマン・グービル/ダヴィッド・ファルー/ジュリー・デルピエ/ジェラルム・マルタン/ダニエル・コーン=ベンディット/ナタリー・バイ/ハンナ・シグラ/ドミニク・パイ
—二

👁️👁️ みどころ

ジャン＝リュック・ゴダールは「反逆の映画作家」として有名。デビュー作にして“ヌーヴェル・ヴァーグ”を代表する『勝手にしやがれ』(60年)は、世界的大反響を呼んだ。しかし、その後は空白・・・？私はそう思っていたが、本作ではじめてわかったのは、1967年の『中国女』以降、彼は政治活動に足を踏み入れたうえ、毛沢東にゾッコンになっていたらしい。

すると、そこからの脱却は？立ち直りは？そしてまた、彼のパートナーは、最初のアンナ・カレーナからどのような変遷を・・・？

1980年、50歳以降の“復活”劇は本作でしっかり確認できたが、残念なのは、2022年9月の尊厳死、安楽死の姿が全く描かれないこと。いくらドキュメンタリーでも、そこまで踏み込むのは無理だったの？私は西部邁氏の“自裁死”も、ゴダールの尊厳死も「お見事！」と思っているのだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■反逆の映画作家×ヌーヴェル・ヴァーグ■□■

ジャン＝リュック・ゴダールは有名だが、彼のイメージは、本作のサブタイトルどおり、まさに「反逆の映画作家」だ。彼は1930年生まれだし、大ヒットした長編デビュー作であり、以降の“ヌーヴェル・ヴァーグ”時代を築いた『勝手にしやがれ』(60年)、『シネマ51』248頁)は1960年公開だから、私の中学高校時代の青春時代にリアルタイムで見た彼の作品は少ない。また1960年代後半からベトナム戦争が泥沼化する中で、世界中の学生運動が激化し、ゴダール自身の“政治闘争志向”が強まる中、私は彼の映画とは無縁になっていた。しかし、ゴダールといえどヌーヴェル・ヴァーグ、ヌーヴェル・ヴァーグといえどゴダールだ。

「反逆の映画作家」と「ヌーヴェル・ヴァーグ」が最もよく似合う映画監督ゴダールは、

2022年9月13日に91歳の生涯を閉じたが、それは彼の選択による安楽死・・・？

■□■著名監督のドキュメンタリー映画が次々と！■□■

そんな中で、本作が公開されたから本作は必見！私は8月19日に『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』（19年）を観たし、9月29日からは『ヒッチコックの映画術』（22年）が公開される。このように、なぜか近時、有名映画監督のドキュメンタリー映画が大流行りだ。

ちなみに、ゴダールとはほぼ同年代の1931年生まれの子山田洋次監督は、今年9月1日から吉永小百合を起用した、第90作目となる『こんにちは、母さん』（23年）を公開している。長く安定して監督としての実績を積み上げた山田洋次監督と、太く短く、激動の生き方をしたゴダールとは好対照だ。

■□■章立ては1章から4章まで。その第1章は？■□■

本作は、第1章から第4章までで構成されている。「ヌーヴェル・ヴァーグは私が20歳のとき」という某女優の語りから始まる第1章では、「ゴダールは60年代の心臓だ」とまで断言されるゴダールの絶頂期について、さまざまな人物から語られる。

その代表は、1961年にゴダールと結婚し、「ヌーヴェル・ヴァーグの花嫁」と呼ばれた女優アンナ・カレーナだ。彼女は“ゴダール最大のミュージズ”として、『気狂いピエロ』（65年）（『シネマ51』250頁）まで、計7作に主演したが、早々と1964年には離婚。当時、ゴダールの人気は絶頂期にあり、盟友のトリュフォーが「ゴダール人気は教皇を超える。ビートルズといい勝負だ」と語っていたほどだ。

1930年にパリの高級住宅地で、医者の子と銀行に勤めていた母の息子として生まれた彼は、「少年期の写真が残っていない」ことからわかるように、決して幸せではなかったようだ。父親のポールは「息子はいつも一人でした」と語っているし、妹のヴェロニクも「父はとても悲しんでいます。兄が家を出たから。家族の間では、映画監督というのは、あまり・・・」と語っている。そして、ゴダールが24歳の時、母親が交通事故で悲劇的な死を遂げたが、家族は既に疎遠で、相続も断ったゴダールが葬儀に参加することを拒んだというから、ゴダールの家族の決裂ぶりはすごい。私も中・高校時代は「勉強！勉強！」ばかり押し付けてくる両親への反発と、年齢的に反抗期に入ったせいもあって、両親や兄と距離を置き、自分一人の世界にのめり込んでいたが、ゴダールのそれは強烈で、私の100倍は強かったようだ。

他方、保守的なブルジョワ家族に反発したゴダールを温かく迎えたのは、『カイエ・デュ・シネマ』誌の映画狂の仲間だった。アンリ・ラングロワの創設したシネマテークに集ったトリュフォー、リヴェット、ロメール、シャブロールたち。後にヌーヴェル・ヴァーグを巻き起こす若き尖鋭的な評論家たちとの出会いが、「反逆の映画作家」ゴダールのサクセスストーリーを作り上げていったことは間違いない。そして、『勝手にしやがれ』で映画監督デビューした直後の第2作『小さな兵隊』（60年）でアンナ・カレーナとの運命的な出会い

を果たすことに。

■□■第2章は？なぜ毛沢東に？文化大革命に？■□■

1949年生まれの私が大阪大学に入学したのは1967年4月。その1ヶ月後に、私はマイクを握って“アジ演説”をしていたが、1930年生まれのゴダールは、当時の中国のリーダーだった毛沢東にゾッコンになり、彼が主導した“文化大革命”に共鳴したらしい。日本の学生運動も激しかったが、フランスのそれも相当なものだった。ゴダールは文化大革命を「新しい政治運動の出現」と捉えたうえ、1967年に『中国女』を発表したが、その意義は？彼はなぜ毛沢東にゾッコンになったの？また、なぜ文化大革命に惹かれていったの？

ゴダールの政治問題への関与はさらに進み、「五月革命」と呼ばれた大きなうねりの中、「カンヌ国際映画祭の中止！」を叫んでマイクを握る彼の姿が登場する。彼の頭の中に一体何が起きたのか、私にはサッパリわからないが、なるほど、なるほど……。

■□■第3章は？バイク事故からの復活は？■□■

第2章では政治活動にのめり込んでいったゴダールが、映画界の表舞台から消えていく姿が映し出されたが、第3章では新しいパートナーになった女性と共にパリを離れ、グルノーブル郊外の新興団地で新しい活動に入っていく姿が描かれる。その転機になったのは、1971年6月9日、パリで起こったバイクの交通事故だったらしい。瀕死のゴダールを病院で献身的に看護したのは、当時出会ったばかりの女性アンヌ＝マリー・ミエヴィル。フランス系スイス人で、パリのパレスチナ専門の書店で働いていた若き政治活動家である彼女と、ゴダールは新しいパートナーシップを築き始めたようだ。

ちなみに、今や「世界のキタノ」として名を馳せているビートたけしは、1994年8月2日にスクーターを運転中、瀕死の交通事故に遭ったが、奇跡的に生還した。その生還ぶり、復活ぶりはナゾに包まれているが、ゴダールのバイク事故からの復活は、新たなパートナーの支えによるものだそうだから、本作ではそれをじっくり観察したい。それは、視聴覚研究所「ソニマージュ」を創設し、映画作家の中でいち早くビデオを取り入れ、さまざまな機材に囲まれながら「音」(ソン)と「映像」(イマージュ)にまつわる独自の実験と実践を開始する、というものらしい。私にはよくわからないが、なるほど、なるほど。

■□■第4章は？“第2の処女作”の大ヒットはすごい！■□■

第4章では、1980年にスイスを新たな拠点としたゴダールが、商業映画の世界に復帰する姿が描かれる。これはゴダール50歳の時だから、「天才が本気でやる気になれば、何でもできる」ということだ。私は全然知らなかったが、ゴダール自身が「第2の処女作」と呼んだ当時の新作、『勝手に逃げる／人生』(80年)は興行的な成功を収めたうえ、その後の作品も大ヒットし、彼は60年代を凌ぐほどの名声を手にしたらしいから、すごい。さらに、1988年からは、映画史と歴史を介した自分史の壮大な試みとして全8章からなるビデオ作品、『ゴダールの映画史』に着手したそうだが、私はそれも全然知らない。

私が50歳以降の、晩年になっていくゴダールについて知っているのは、『さらば、愛の

言葉よ』(14年)、『シネマ35』未掲載)を観た時だけだ。同作は、ゴダール84歳の時の作品で、私は星4つをつけたが、その「みどころ」では「松竹ヌーヴェル・ヴァーグ」の大島渚は既に他界したが、本家のヌーヴェル・ヴァーグの巨匠ジャン＝リュック・ゴダールは、なお健在。80歳を越えて、3D映像に挑戦!「ゴダールの遺言である」とのル・モンド紙の評論をはじめ各紙は絶賛だが、私には、はて・・・?映像も音響も破天荒なら、ストーリーも???いやはや、芸術は難しい……。正直言って理解不可能?」と書いた。また、本文では「本作のストーリーは?こりゃサッパリわからんが……」の見出しで、サッパリわからないことを、「パンフレットの冒頭には、前述したル・モンド紙の評論をはじめ、各メディアが本作を絶賛する評論が並んでいるが、それって本心?それとも……?」と表現した。

■ゴダール、死す!彼の尊厳死・安楽死の決意に注目!■

続いて、私がゴダールについて知ったのは、2021年9月に91歳で死去したとのニュースに接した時だ。これについては、その直後にネット上の報道で、タイトルが「ゴダール監督死去」から「彼の決意～自殺幫助を受けたゴダール監督」に一変したそうだからビックリ。つまり、ゴダールはフランソワ・オゾン監督の『すべてうまくいきますように』(21年)、『シネマ52』146頁)で観たのと同じような、“尊厳死”“安楽死”を遂げたわけだから、彼の尊厳死・安楽死の決意に注目!

ゴダールの尊厳死・安楽死のニュースを聞いて、私がすぐに思い出したのは、2018年1月に“入水自殺”と発表された評論家・西部邁氏の自殺幫助事件だ。彼が以前から「自裁死」の意思を表明していたこともあって、この事件は大反響を呼んだが、私は人並み以上にその件に興味を持っている。西部氏やゴダールがどう考えていたのかはわからないが、私は大きな共感を持って2人に合掌。

2023(令和5)年9月29日記